

「死のクオリティー」の言葉の重み

先のHP記事「書籍『「もうガマンできない！広がる貧困』を読んで（「雑学BN」の書籍等読後感関係（IV）、2007.09.15.：参照）」の中で、「一旦『「貧困層』』に入ってしまうと、ちょっとやそつとでは抜け出せないようになっている今の日本の社会的構図を知ると、正直複雑な心境……。」と記したが、先日「日本の現場：三畳一間に向き合う～横浜寿地区～」を見て、正にその現状の番組の一つかなと思った。

戦後の経済復興を支えた横浜の120軒余りの簡易宿泊所が立ち並ぶ労働者の街が、今は仕事や家族から切り離れた高齢者の終の棲家になりつつあり、三畳一間で亡くなる「孤独死」が年間150件とか。

番組はその地区で診療所を開き、「孤立しがちな高齢者と接することで孤独死を防ぎ、少しでも本人の願いにそった毎日を送らせたい…」と、宿泊所にも往診し、治療だけでなく患者の声に耳を傾ける医師を追ったものであった。

この夏の猛暑で衰弱して行く老人、故郷に一度帰りたいという重病の老人、家族との再会を願う危篤状態の老人、家族の写真に涙する老人、……。

医師は、「死の瞬間のその前までの『死のクオリティー』に取り組む活動があってもいいのではないかと、日々老人たちに向き合っている。

「1週間も部屋から出てこないから」と簡易宿泊所からの連絡で駆けつけると、老人は危篤状態で発見され、「死ぬ前に30年前に別れた息子に一目会いたい」と語る。

医師は息子を捜し当て連絡を取るが、息子は「飲んだくれで家庭を崩壊させ、自分の家庭すら壊された父親に会いたくない！」と最初は面会を拒むが、医師の説得で父親に会い、その2日後にこの老人は逝った。

こうした取り組みこそが、医師の云わんとする「死のクオリティー」ということか。

それにしても、老人たちのそれぞれの過去の事情がどうであれ、日本の戦後経済成長を支えた人たちが、大都会の片隅の「三畳一間」でひっそりと人生最期の日々を送る現状を知ると、今の日本の社会的構図に、益々複雑な心境に落ち入る。